

## 草津白根山の火山活動解説資料（平成 29 年 1 月）

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

湯釜火口及び水釜火口周辺の熱活動の高まった状態が継続しています。監視カメラによる観測では、引き続き湯釜北側噴気地帯の噴気孔から噴気が認められています。全磁力観測によると、2014年5月以降の湯釜近傍地下の温度上昇を示唆する変化は、2014年7月に停滞したものの、温度低下を示唆する変化には転じていません。また、東京工業大学によると、2014年以降、火山ガス成分や湯釜湖水の化学組成は火山活動の活発化を示す状態が確認されています。

なお、東京工業大学の監視カメラ（湯釜火口内）では、火口内に特段の変化は認められません。火山性地震は少なく、地殻変動観測に特段の変化は認められません。

小規模な噴火が発生する可能性があるため、湯釜火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るため注意してください。また、ところどころで火山ガスの噴出がみられ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがありますので、注意してください。

平成26年6月3日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げました。その後、警報事項に変更はありません。

## ○ 活動概況

## ・ 噴気など表面現象の状況（図2～4）

奥山田監視カメラ（湯釜の北約1.5km）による観測では、引き続き湯釜北側噴気地帯の噴気孔から噴気が認められました。湯釜からの噴気は認められません。

東京工業大学の監視カメラ（湯釜火口内）では、火口内に特段の変化は認められません。

2月1日（期間外）に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、前回の観測（2016年5月）と比べ、湯釜火口壁北側、水釜火口の北から北東側の斜面の状況に特段の変化はなく、引き続き地熱域<sup>1)</sup>が認められました。

## ・ 地震や微動の発生状況（図5～6、図7-①）

2014年3月上旬から湯釜付近及びその南側を震源とする火山性地震が増加していましたが、2014年8月下旬以降は概ね少ない状態で経過しています。

火山性微動は観測されていません。

## ・ 地殻変動の状況（図1、図7-②～⑥）

GNSS<sup>2)</sup>連続観測では、湯釜を挟む基線で2014年4月頃からみられていたわずかな伸びの変化は、2015年11月頃より停滞しています。

湯釜周辺に設置している東京工業大学の傾斜計<sup>3)</sup>によると、2014年3月から湯釜付近浅部での膨張を示すと考えられる変動が観測されていましたが、2015年10月頃から停滞または収縮を示すと考えられる変動に変化しています。

## ・ 全磁力変化の状況（図8～10）

全磁力<sup>4)</sup>連続観測で、2014年5月頃から継続していた湯釜近傍地下の温度上昇を示すと考えられる変化は小規模なものと考えられ、2014年7月頃から停滞しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成29年2月分）は平成29年3月8日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、関東地方整備局、東京大学、東京工業大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『2万5千分1地形図』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平26情使、第578号）。

- 1) 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置とは、物体が放射する赤外線を感じて温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 2) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。
- 3) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがあります。1 マイクロラジアンは 1 km 先が 1 mm 上下するような変化量です。
- 4) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定されます。

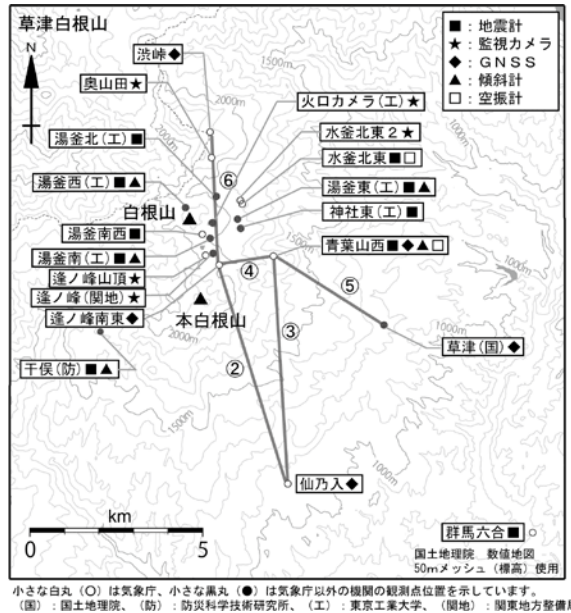


図1 草津白根山 観測点配置図  
 ・GNSS 基線②～⑥は図5の②～⑥に対応しています。

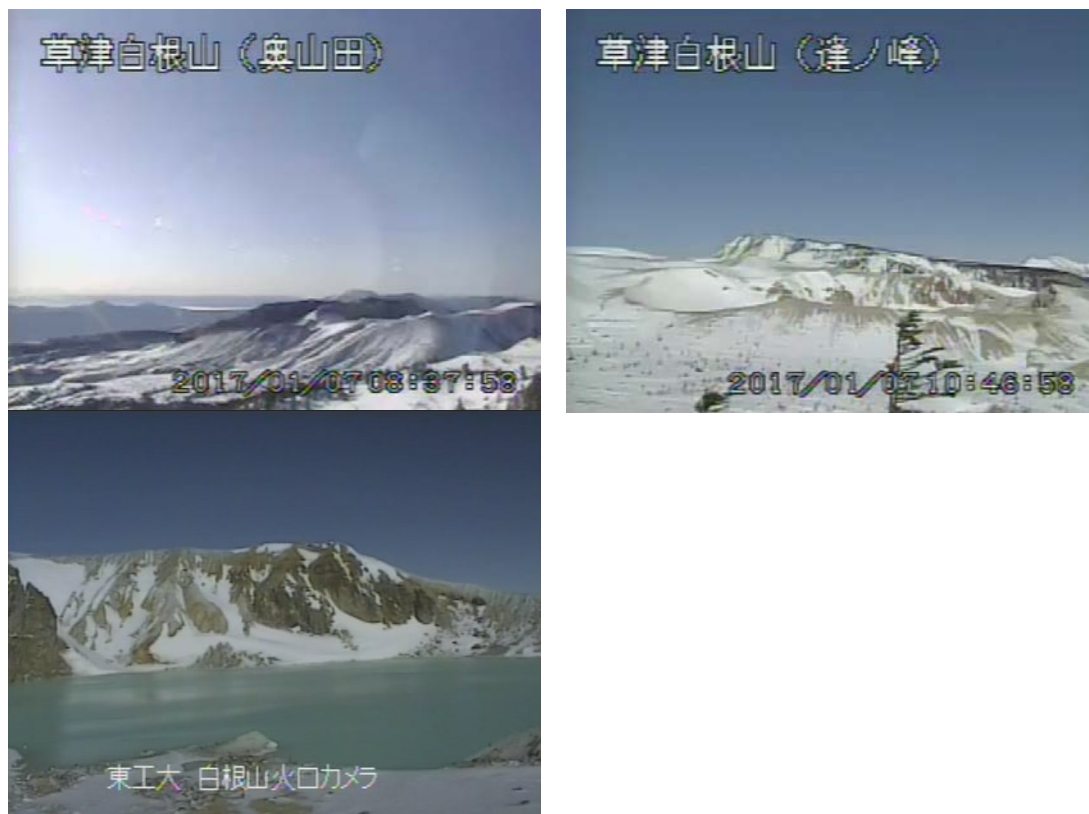


図2 草津白根山 湯釜付近の状況

左上図：奥山田監視カメラ（1月7日） 右上図：達ノ峰（山頂）監視カメラ（1月7日）  
 左下図：東京工業大学監視カメラ（1月7日）

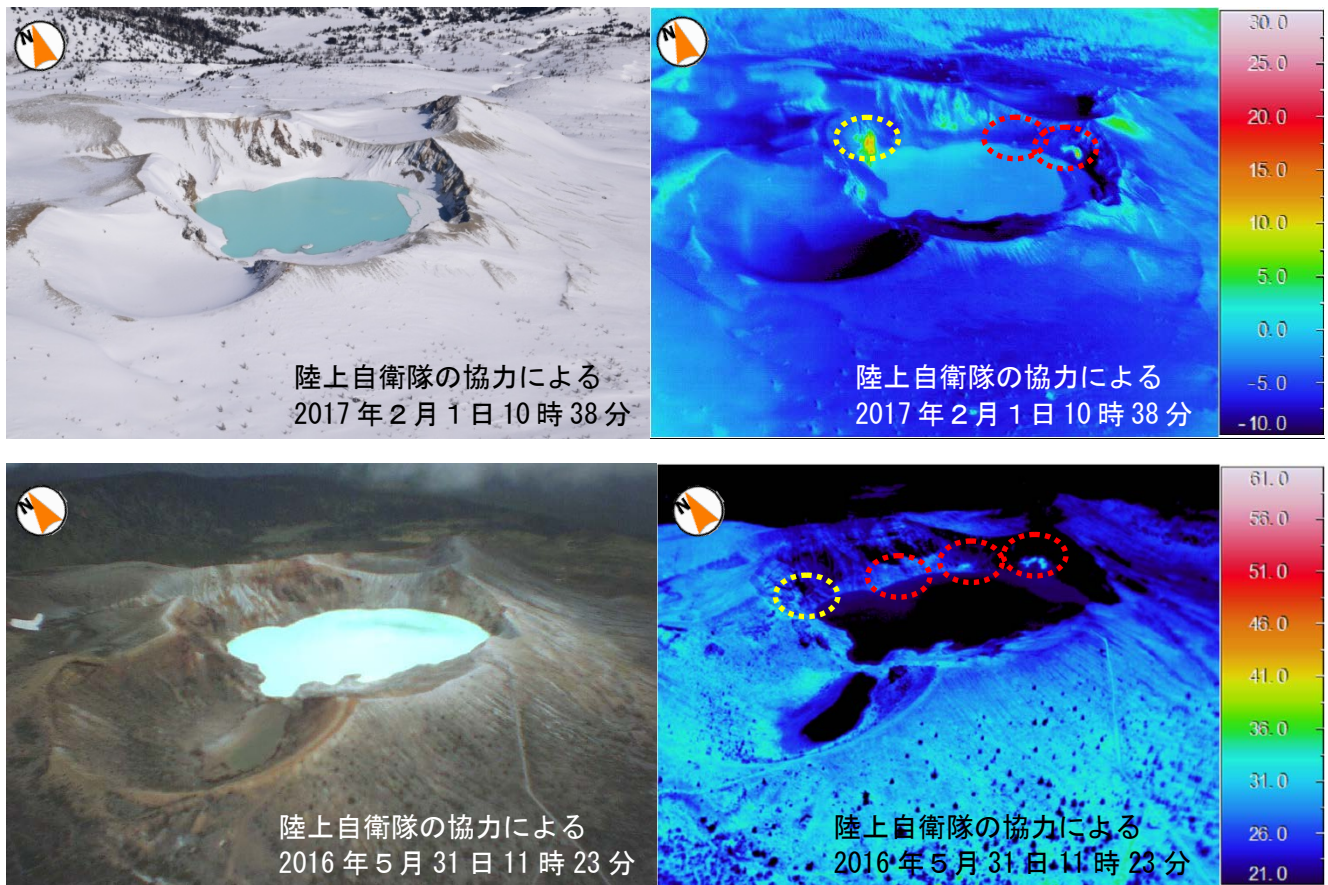


図3 草津白根山 湯釜周辺の状況及び地表面温度分布

- ・ 2月1日（期間外）に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、湯釜火口内の北側壁面に引き続き地熱域が確認されました。地熱域の分布は、前回の観測（2016年5月31日）と比較して大きな変化はありませんでした（赤破線丸）。北西側壁面の温度が高い部分（黄破線丸）は、日射の影響と考えられます。湯釜火口内では引き続き、浮遊硫黄が認められました。

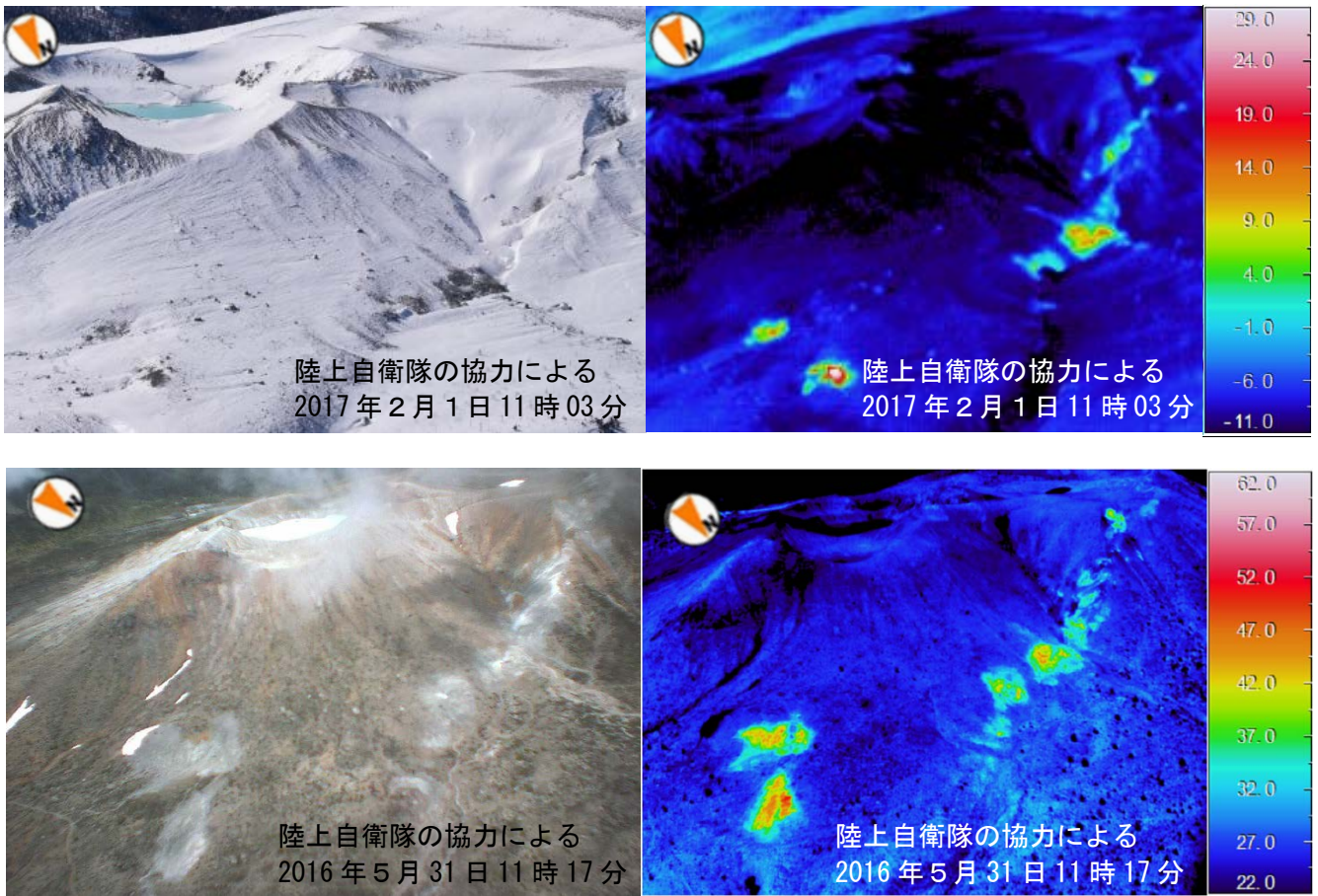


図 4 草津白根山 水釜火口北側及び北東側斜面の状況及び地表面温度分布

- ・ 2月1日（期間外）に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、水釜火口北側及び北東側斜面に少量の噴気を確認しました。前回の観測（2016年5月31日）と比較して地熱域の分布に大きな変化はみられません。

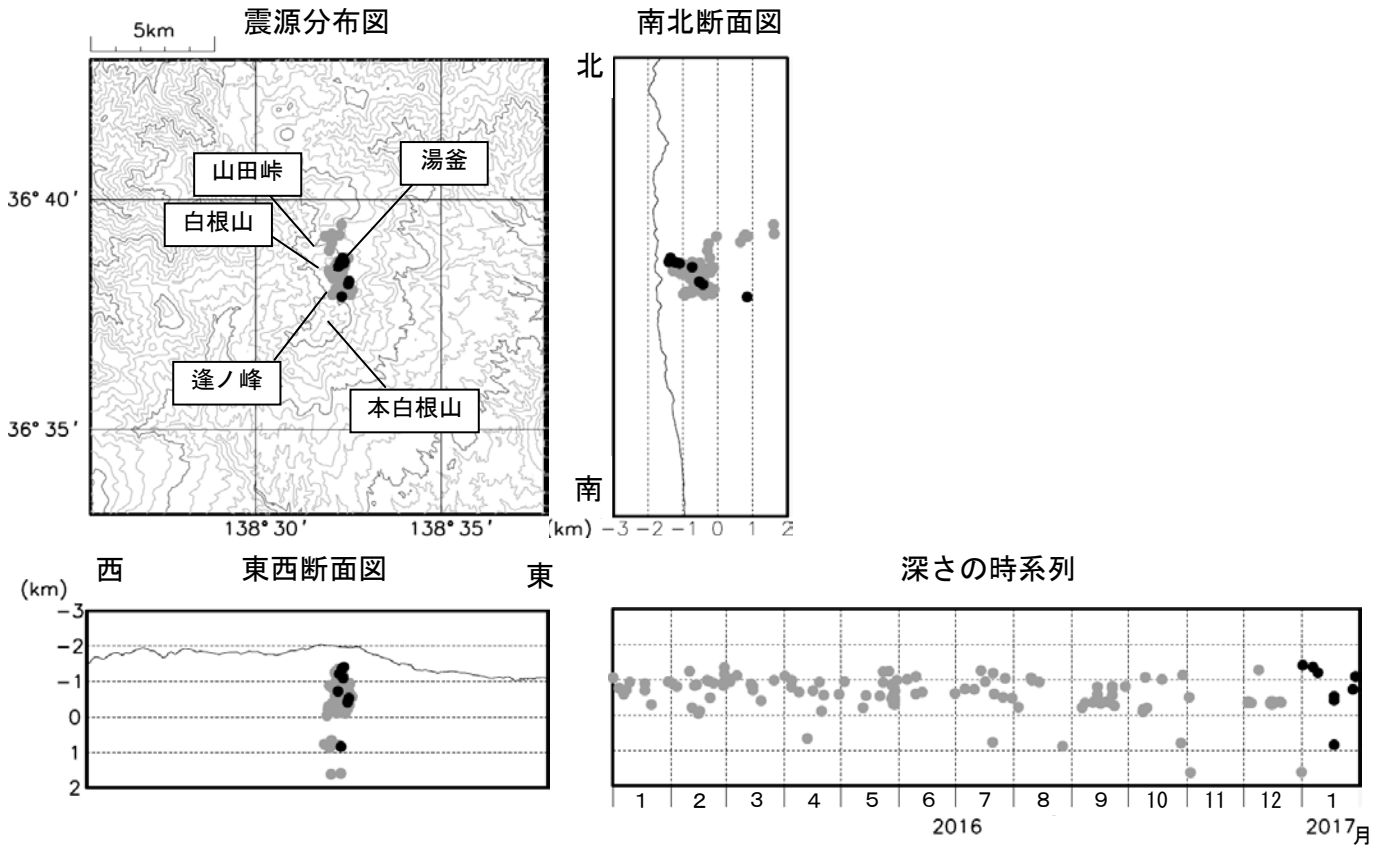


図5 草津白根山 震源分布図 (2016年1月1日～2017年1月31日)

- : 2016年1月1日～2016年12月31日
- : 2017年1月1日～1月31日

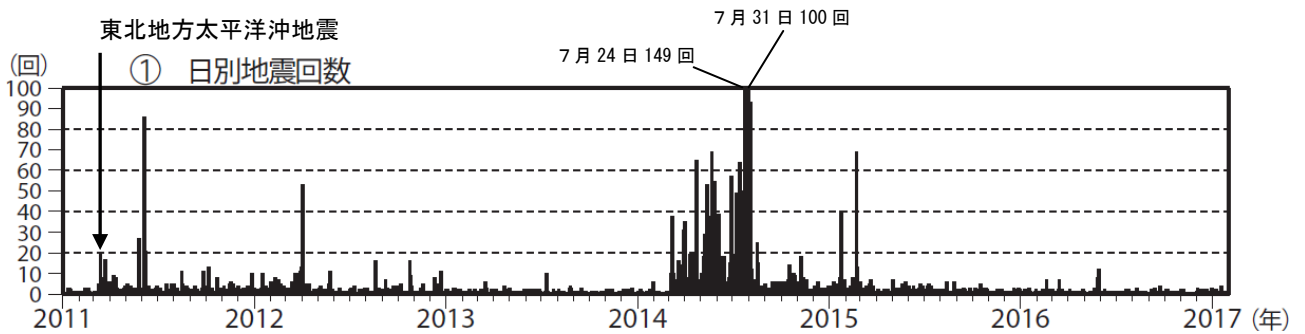


図6 草津白根山 日別地震回数 (2011年1月1日～2017年1月31日)

・2014年3月上旬から湯釜付近及びその南側を震源とする火山性地震が増加しました。2014年8月下旬以降は2015年1月と2月に一時的な増加がみられたものの、概ね少ない状態で経過しています。

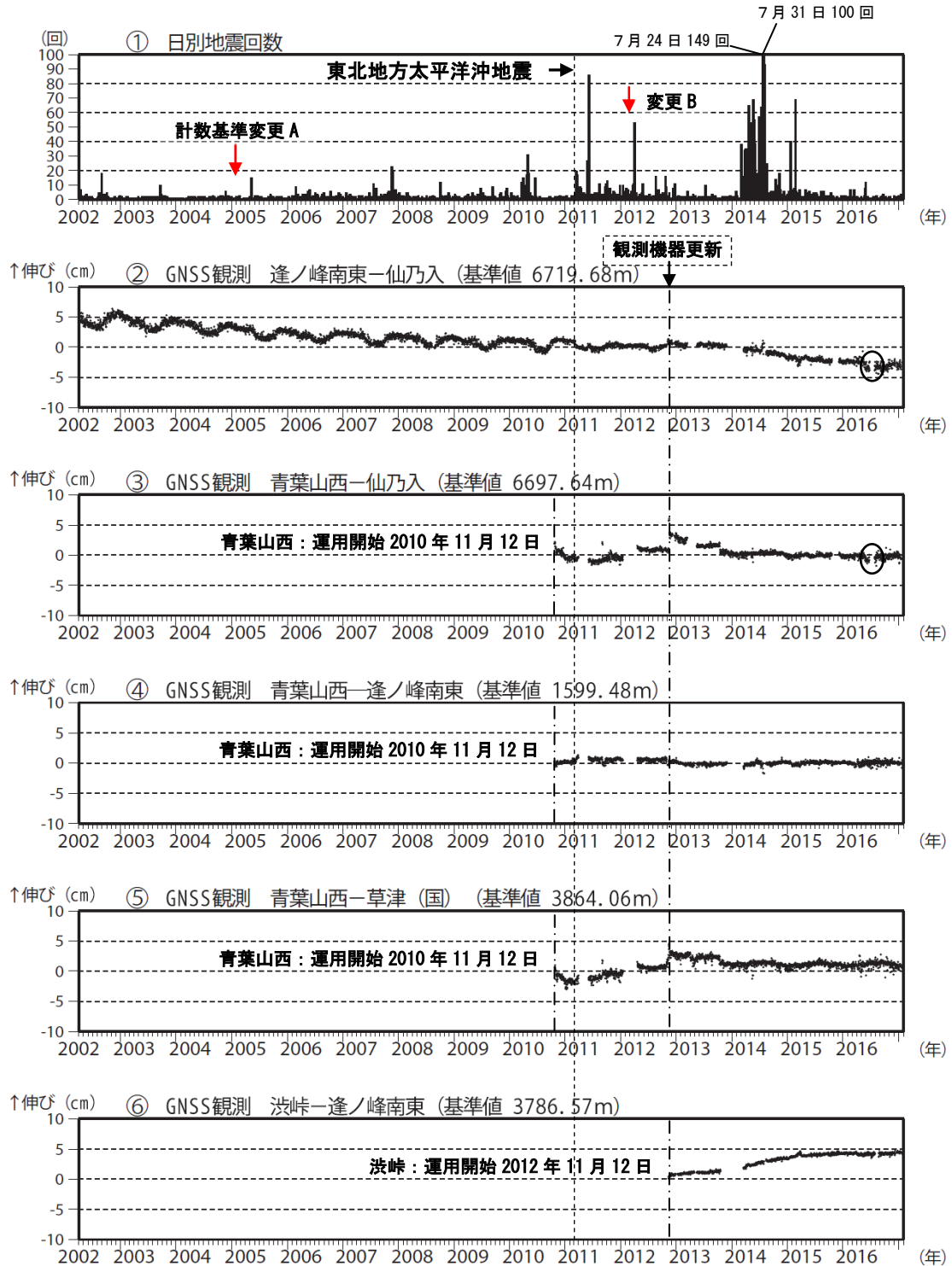


図7 草津白根山 火山活動経過図（2002年4月1日～2017年1月31日）

湯釜を挟む基線⑥で2014年4月頃からみられていたわずかな伸びの変化は、2015年11月頃より停滞しています。

① 山体付近で発生した地震の日別回数

検測基準（赤矢印は計数基準変更時期を示します）

- ・2005年1月21日まで：水釜北東振幅（上下動） $0.05\mu\text{m}$ 以上、S-P 2秒以内
- ・2005年1月21日（変更A）：検測対象波形を変位から速度に変更
- ・2005年1月21日（変更A）～2012年2月29日：水釜北東振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間2秒以内
- ・2012年3月1日（変更B）から：水釜北東振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P1.5秒以内

②～⑥ GNSS連続観測による基線長変化（国）：国土地理院

- ・2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。それ以前に②の基線長変化にみられる冬季の伸びと夏季の縮みの傾向は季節変動による変化です。
- ・②には東北地方太平洋沖地震（2011年3月11日）に伴うステップ状の変化がみられます。
- ・②③にみられる2016年4月頃からの変化は（図中の○）、仙乃入観測点付近の局所的な変動と考えられます。
- ・②～⑥は図1の②～⑥に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。

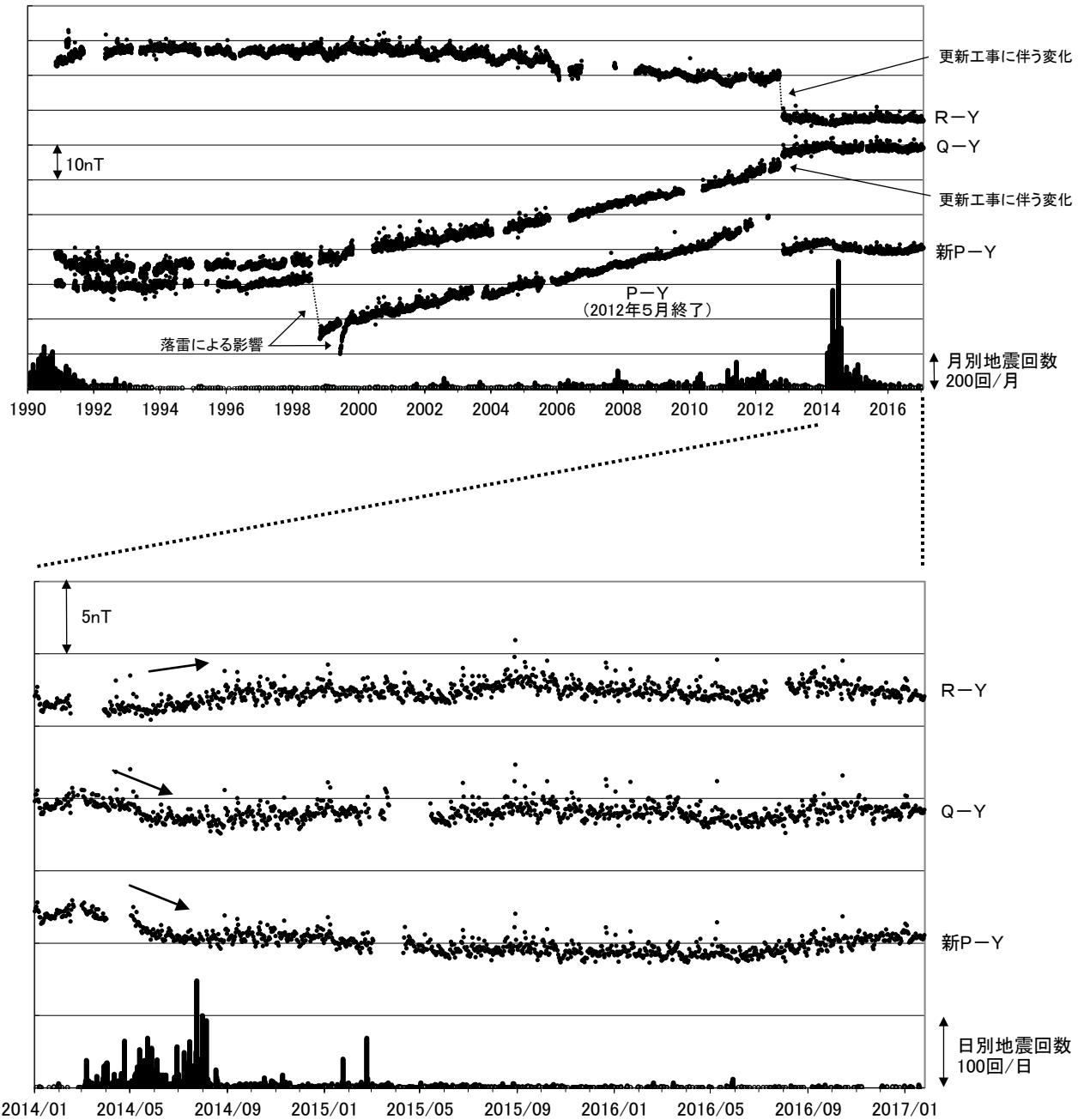


図8 草津白根山 全磁力連続観測による全磁力値の変化及び地震回数  
 上段：1990年～2017年1月25日、下段：2014年1月～2017年1月25日

・連続観測点 P、Q、R および新 P における八ヶ岳地球電磁気観測所（東京大学）(Y) との全磁力の夜間日平均値差。最下段は日別地震回数を示しています。全磁力連続観測で、2014 年 5 月頃から継続していた湯釜近傍地下の温度上昇を示すと考えられる変化（図中の黒矢印）は小規模なものと考えられ、2014 年 7 月頃から停滞しています。グラフの空白部分は欠測を示します。

・P、Q、R および新 P の位置は図9に示されています。

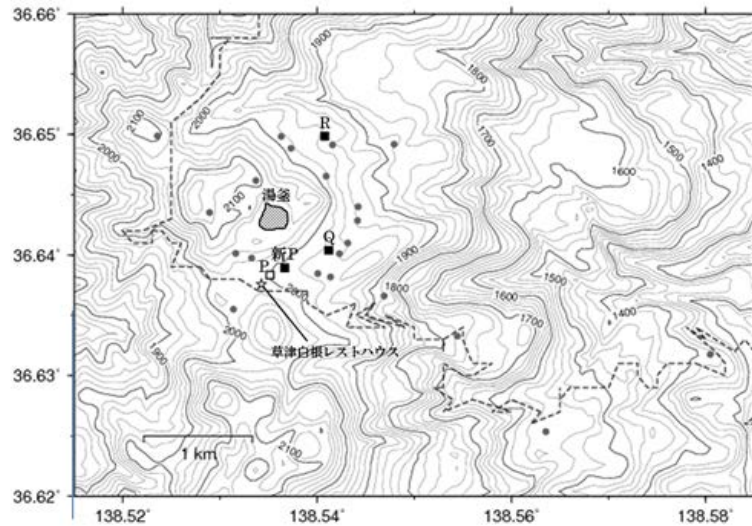


図9 草津白根山 全磁力観測点配置図

- ：連続観測点（新P、Q、R：観測中）
- ：連続観測点（P：2012年5月観測終了）
- ：繰り返し観測点

※図8のY（東京大学八ヶ岳地球電磁気観測所）は地図の範囲外（草津白根山の南約62km）

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、山頂直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。図8に示すように、山頂部で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなるのがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

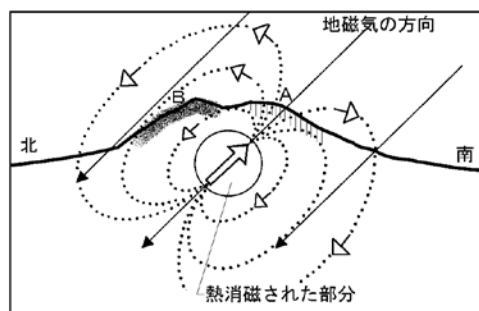


図10 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

北側の観測点で全磁力増加  
南側の観測点で全磁力減少

[消磁]



火山体内部の温度上昇を示唆する変化

北側の観測点で全磁力減少  
南側の観測点で全磁力増加

[帯磁]



火山体内部の温度低下を示唆する変化